

「此處が好いだらう。」

どこでも好いが」とか何とか言つて、

僕を一番奥の端の留置場の中へ押し込んだ。

ガチリと岩疊な錠前を、外から下ろして了つた。

僕の血液は一時に沸騰した。

此んな事にならない爲に、僕はあばれたのだ。

それに東京から歸つて、直ぐにおとなしくしても、ニセキチガヒだつたと思はれては損だと言ふ心持も手傳つてやつた事だ。

棄て鉢な焦燥に驅られて、揚句の果てが二度目の檻禁だ。

僕はまなこがくらんで了つた。

逆立つた眉毛が見える丈で、頭の中は起重機が据えられたやうだつた。

ダダダダ　ダダダダ　ダダイスト、

ダガバジ　マクワウリ。